氏名（本籍）	内野　彰裕
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第　9972　号
学位授与年月	令和　3　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	幼稚園の園庭の築山が幼児の発達に与える効果

主　査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己
副　査	筑波大学准教授	医学博士	柳　久子
副　査	筑波大学准教授	博士（学術）	水野智美
副　査	東京家政大学准教授	博士（ﾋｭｰﾏﾝ・ｹｱ科学）	野澤純子

論文の内容の要旨

内野彰裕氏の博士学位論文は、これまで幼稚園の園庭の築山に関する研究が１園を対象としたものであったのに対し、全国の幼稚園、こども園における築山の設置状況や効果についての教諭の認識を明らかにするために質問紙調査を行い、築山が幼児の発達に与える効果について客観的且つ詳細に検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第１章では、本論文における問題の所在と目的を明確にするため、園庭の築山に関する研究動向について概観し、これまでの研究が１つの園に特化するものがほとんどであり、客観性に乏しい面が否めないことを指摘している。本論文では全国の幼稚園やこども園の園庭における築山の実態や幼稚園教諭による認識を調査し、園庭の築山が幼児の発達に与える効果について明らかにすることを目的としている。

第２章は、2017 年 10 月から 2018 年３月に収集した、全国 45 都道府県の幼稚園、こども園 340 園の管理者を対象にした質問紙調査である。築山の設置状況を把握することを目的としており、全国の幼稚園、こども園のうち、約４割の園に築山があること、保育形態は一斉保育よりも自由保育の傾向が強い園に築山がある割合が高いこと、築山の主な自然物構成要素は、「土」、「草花」、「樹木」の 3 点であること、「斜面」と「トンネル」は築山での遊び場を特徴付ける２大要素であることが確認されている。築山の設置目的は、「遊びを豊かにするため」という大目的の中に「身体能力の向上」と「自然との触れあい」という目的があることが確認され、遊びを豊かにし、身体能力の向上にも繋がる遊具は数多くあるが、加えて自然との触れあいを持つことのできる遊び場は限られ、これも築山の特徴の一つであると述べている。また、築山を設置しない理由については「設置場所がないから」が最も多く、「危険だから」はほとんど無いことから、築山が危険な遊び場であると認識されていないことが確認されている。

第３章から第５章は、2018 年３月から 2018 年５月に収集した、築山がある幼稚園、こども園 31 園に勤務する幼稚園教諭 504 名を対象にした質問紙調査である。

第３章では、築山で子どもがどのように遊び、活動しているかについて把握することを目的としており、ほとんどの園で築山を「自由遊び」で使用していること、また、ほとんどが「遊び場」として活用していることが確認されている。また、築山で遊ぶ子どもの割合は、「クラスの半数以上」と答えた教諭が７割近くいることが確認されており、築山に遊具としての魅力があることを指摘している。遊びの内容については 29 項目についてどの程度見られるかを尋ねているが、「よく見られる、やや見られる」が多い順に「坂を上り下りする」、「鬼ごっこをする」、「生き物を捕まえる、観察する」であることが確認され、さらに 29 項目中 26 項目で「よく見られる、やや見られる」が過半数であることが確認されて

いる。築山では多様な遊びが見られること、また仙田(1992)が提唱する「遊環構造」の条件に一致することから、「こどもを集め、楽しませ、育てる空間」があると述べている。

第4章では、子どもたちが築山で遊ぶことにより、どのような教育的効果が得られるのかについての幼稚園教諭の認識を明らかにすることを目的とし、27項目についてどの程度賛成するかを尋ねている。「とても賛成／やや賛成」を合わせた1位は「斜面を上り下りすることで身体能力が高まる」、2位は「斜面を上り下りするだけで、ワクワクした気持ちになる」、3位は「高い場所から遠くの景色を楽しめる」であり、上位3項目は9割を超え、特に高い効果があることが確認されている。また、これらの共通要素として、いずれも斜面、高低差といった「地形的特徴を活かした遊びによる効果」であると指摘している。さらに、27項目中26項目で「とても賛成／やや賛成」が過半数であることから、築山では多様な教育的効果が得られると述べている。

第5章では、子どもたちが築山で遊ぶ際におきるケガについて明らかにすることを目的としており、築山でのケガの内容は、ほとんどが擦り傷で、打撲が1割、骨折がわずかに確認されている。築山でのケガが築山以外の遊具に比べて多いかどうかを尋ねたところ、「少ない／やや少ない」と「同じ」を合わせ、9割を超えることが確認され、築山でのケガが他の遊具と比べて変わらないことを指摘している。築山でのケガがおきた場所は「斜面」がほとんどであること、ケガ防止策については、「危険な物が落ちていないかを確認する」、「子どもを見守る教諭の人数を増やす」が過半数を占めていることが確認されている。

第6章は、2019年5月に収集した、築山、すべり台、砂場がある幼稚園に勤務する幼稚園教諭50名を対象にした質問紙調査である。子どもたちが築山で遊ぶことによって得られる学びの効果と、築山以外の遊具での学びの効果に、どのような違いが見られるのかについて、幼稚園教諭の認識を明らかにすることを目的としている。3つの遊具で遊ぶことによって、子どもにどのような学びの効果があると考えるかを17項目について尋ねたところ、築山が一番学びの効果があると認識された項目は、「身体を動かすことで身体能力が高まる」、「挑戦しようとする気持ちが育つ」、「バランス感覚を育む」、「危険に対処する方法が身につく」、「四季の変化を知る事ができる」、「植物や昆虫と触れあうことで、生き物を可愛がり、大切にする気持ちが育つ」、「忍耐力が身につく」の7項目であることが確認されている。

第7章で著者は、総合考察として本研究での成果をふまえ、築山は「遊びを豊かにするため」という大目的の中に「身体能力の向上」や「自然との触れあい」といった目的がみられるとし、この2つの設置目的を軸に、築山の形状と構成要素を4類型に分類し、それぞれの効果を述べている。

築山でのケガについては、ケガに至らないヒヤリハットの事例についてさらに調査し、保育の上で具体的な注意点について示唆を得られる研究を行っていく必要があるとしている。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、全国の幼稚園、こども園における築山の実態を明らかにし、築山が幼児の発達に与える効果について詳細に検討したものであり、独創的な研究である。特に、築山の効果に関する幼稚園教諭の認識を把握するにあたり、築山だけでなく築山以外の遊具との比較調査も行い、築山の学びの効果について多面的に明らかにしている。さらに、築山の形状と構成要素を4類型に分類しそれぞれの効果を述べ、園庭の大きさや設置目的に応じて築山を実際に導入することができるように提言を行っている。

これらの結果は、園庭の築山がもたらす効果について認識されるだけでなく、園庭環境の重要性を再考するという視点からも意義があるものであり、園庭での遊びがより豊かになり幼児の発達への効果がさらに期待できることから、重要な成果として認められる。以上、本論文は研究の意義、独自性、妥当性、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断できる。

令和3年1月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。